



## ■ストレンナ2024

ドン・ボスコの夢

わたしたちの夢

~9歳の夢から200年~

総長による解説

(2023年12月8日公布)

阿部仲麻呂 訳

■サレジオ会 2024 年度ストレンナ (2023 年 12 月 8 日公布)

## 「夢をいただく夢——『オオカミ』から『小羊』へと変わる心」

STRENNA 2024 ; “The dream that makes you dream” A heart that transforms “wolves” into “lambs”

総長としての奉仕をつづけているときに、私には『ストレンナ』[贈りもの、年間目標] がドン・ボスコと後継者たちが毎年サレジオ家族全体に与えてくれる最も美しい贈りもののひとつであることがわかりました。『ストレンナ』は私たちの旅路を助け、最も遠い場所にも到達できるように物事の幅を広げてくれます。同時に、個々の教育的かつ司牧的な共同体の旅路のために提案されたよびかけを受け容れ、統合し、大切に自由裁量の余地を各自に対して残しています。

この 2024 年に、私たちは、若きジョヴァンニが 9 歳から 10 歳にかけて自宅でみた「夢の情景」(註 1) つまり通称「9 歳のときの夢」が生じた 1824 年から数えて二度目の 100 周年を祝います。

私は、200 周年を祝っているこの夢こそが「ドン・ボスコの生き方および考え方の全体に影響を与えたもの」なのだとは強く信じています。そして特に、「一人ひとりの人生および世界の歴史において神が現存していることを感じ取る」(註 2) 彼の方法が『ストレンナ』の核心に位置づけられるものであるとも考えています。この『ストレンナ』は、サレジオ家族全体にとっての教育および司牧にまつわる一年を導くものです。『ストレンナ』は、福音宣教の際にも、教育的な支援の際にも、さらには社会的な促進活動の際にも、さらに深められ、頻繁に読み返されるべきものです。このサレジオ家族は、ドン・ボスコをながめるときに、聖霊のいぶきを体現した父親らしさを見い出すのです。

ここで「9 歳の夢」を思い起こしましょう。実際に、彼の自叙伝の最初のページは、単純明快で預言的な仕方でドン・ボスコの精神や使命を表現しているのです。そこには、ドン・ボスコに託された仕事の分野、すなわち若者について書かれています。彼の使徒職の目的は、教育を通して彼らひとり一人を成長させることです。その際の効果的な教育方法として「予防的なシステム」が提示されているのです。こうして、彼が行ったすべてのこと、そして今日、私たちが行っているすべてのことの背景が示されたのです(註 3)。これは、ドン・ボスコ生誕 200 周年(2015 年)を祝う三年前からの準備期の第一年目の際にサレジオ家族にすでに贈られている『2012 年度のストレンナ』文書の結論部で、名誉総長パスクアル・チャベス・ビラヌエバ師が書いた言葉です。

「このテキスト [『オラトリオの回想録』における「9歳の夢」の記述箇所のこと] は、『9歳の夢』が何であるかという本質を最も美しく要約しています。しかも夢の意義を単純明快かつ預言的に示すとともに、カリスマ性および教育的な価値を備えるものとしても示すものです。まさに象徴的な夢なのです。そして、この一年を通じて、私たちはこの夢をドン・ボスコ家族全体の心として自分たちの生活によってさらに実現できるように努めます。その夢は、『サレジオ家族の高揚した想像力をかきたてることで重要な柱となり、いまでも、今後もまた重要な柱となりつづけ、まさに創成神話と呼べるほどに非常によく知れ渡った理想の情景 (ドリーム・ヴィジョン)』(註4) なのです。もちろん、文脈をじゅうぶんに考慮して批判的に読み取ることも必要です。テキストに対して注意を払うことは、ドン・ボスコ自身が行ったことであり、サレジオ会の歴史の専門家たちが行ったことでもあるのです。その都度、適切な解釈の仕方を提供することで、最新の重要で実存的な読み方に到達させることがテキストを読む目的なのです。ドン・ボスコ自身が次のように宣言しています。『まがいもなく、私はその夢を生涯を通じて心に留めつづけたほどです。まさに、この夢は生涯を通じて私の心に深く印象を残したのです』(註5)。それゆえに、この夢は彼自身の夢であるにとどまらず、しかも今日に至るまでサレジオ修道会の旅の歩みの一部となっています。そして、この夢は間違いなく私たちサレジオ家族全員に届いているのです」。

過去に「9歳の夢」の最初の100周年に言及したフィリッポ・リナルディ師の言葉は、次のとおりです。「この100周年という節目を迎えるにあたって、私たちはこの夢をより深く理解し、細部にわたって定期的に黙想し、その黙想の際に得たひらめきを惜しみなく実践することを厳粛な義務としなければならないでしょう。まさにドン・ボスコのまことの息子として、あるいは完全なサレジオ会士として、その名に恥じないためには、夢の奥深さを惜しみなく実践することが必要不可欠な義務なのです」(註6)。私たちは、いま、この第二の100周年という特別な出来事を鮮明に意識化しています。サレジオ家族が生きている世界全体では今年も数多くの出来事が起こることでしょう。その際、この一年のあらゆるふるまいが、いつでも祝福に満ちるとともに感慨深いものとなるように、私たちの生き方の希望に満ちた見直しの雰囲気において、祝祭的で、また深遠な瞬間に到達しましょう。主イエスが生きておられることを強く望みながら、若者たちが「偉大な」夢をいただくのを助けるために、勇気ある提案をなすとげ、あの先生つまり御婦人、私たちの聖母とともに「手と手をたずさえて」。

## 1. 「夢をみました……」——とても特別なひとつの夢

いまから200年前、まだ幼かったジョヴァンニ・ボスコは、その生涯にわたって「しるし」となる、ひとつの夢をみました。その夢の意味をドン・ボスコが完全に理解できるようになったのは、生涯の終わりのときでした。ドン・ボスコ自身によって語られた夢は次のとおりです。そのテキストは、アントニオ・ダ・シルヴァ・フェレイラによる批判版に

もとづいています (註7)。

#### 【初めの枠】

私が夢をみたのは、その年のことでした。その夢は生涯、私の心に深く刻まれました。

#### 【少年たちの情景とジョヴァンニの介入】

この夢のなかで、私は自分の家のすぐ近くの、とても広い野原にいました。大勢の子どもたちがそこで遊んでいました。笑っている子もいれば、ゲームをしている子もいました。しかも、悪態をついている子もいました。その悪口を聞いたとき、私はすぐさま子どもたちのなかに飛び込み、止めようと思いました。その際、言葉や拳で止めようとしたわけです。

#### 【威厳のある男性の出現】

そのとき、ひとりの威厳のある男性が現れました。大人です。白い外套を羽織り、顔は直視できないほどに輝いていました。すかさず彼は次のように付け加えました。「あなたはこの友人たちを獲得しなければなりません。つまり、あなたは、この友人たちを打ち叩くことによってではなく、優しさや愛情によって獲得しなければならないのです。すぐに始めなさい。罪の醜さと美徳の価値を教えるのです」。混乱し、うろたえた私は次のように答えました。「私は無知で貧しい子どもにすぎません」と。この若者たちに対して、私は信仰について話すことなどできなかったのです。しかし、その瞬間、子どもたちは喧嘩をやめ、叫ぶことや悪態をつくことをやめました。

#### 【この人物の正体についての会話】

自分が何を口走っているのかもほとんどわからず、私は次のように尋ねました。「不可能なことを、私に命令するあなたはいったい誰なのですか」と。

「あなたには不可能に思えるからこそ、服従および知識の習得によって可能にしなければなりません」。

「いったい、どこで、どのような手段で、知識を得ることができまるのですか」。

「私はあなたに先生を与えましょう。彼女の指導のもとで、あなたは賢くなることができます。彼女なしには、あらゆる知恵でさえも愚かなものにすぎないのです」。

「しかし、そう言うあなたはいったい誰なのですか」。

「私は、あなたの母親が一日に三度あいさつをするように教えた女性の息子です」。

「私の母親から、許可がない限り、知らない人とはかかわるなと教えられています。ですから、あなたの名前を教えてください」。

「私の名前については母に聞いてください」。

【その瞬間、彼の横に気品に満ちた女性が立っているのがみえました】

彼女は彼の横に立っていました。外套を羽織っていました。明るい星で覆われたような外套を全身にまとっていたのです。私が繰り出す質問や答え方から、私の混乱状態に気づいた彼女は私に近づくよう手招きしました。彼女は優しく私の手を取り、「みなさい」と言いました。どうやら若者たちはみんな逃げてしまったようでした。大量のヤギ、犬、猫、クマ、その他の動物たちが、子どもたちの代わりにそこにおり、うごめいていました。「ここが、あなたの働くべき場所です。謙遜で、強く、たくましく。そして、この動物たちに起こっていることに、すぐに注目しなさい。それが私の子どもたちのために、あなたがしなければならないことなのです」。私は再びあたりを見回しました。これまでは野生の動物がみえていたのに、いまは優しい子羊たちがみえました。子羊たちはみんな、まるでその男性[イエス]と女性[マリア]を歓迎するかのように、よろこびにあふれて飛び跳ね、鳴いていました。そのとき、私はまだ夢をみていました。そのとき、私はまだ夢のなかにおり、泣き始めました。私はその女性に、もっとわかるように話してほしいと、頼みこみました。この夢がいったい何を意味しているのかわからなかったからです。すると彼女は私の頭に手を置いて、「やがてあなたはすべてを理解するでしょう」と述べました。

【最終的な枠組み】

そのとき、物音で目が覚め、すべてが消えました。私は、あまりにも途方に暮れました。私は自分で自分の手を打っており、かなり痛みました。しかも、私は自分で自分の顔も打っており、痛みが顔に残っていました。ともかく、あの男性と女性の記憶や、それぞれから言われたこと、そして私自身が聞いたことなどが、自分の心を占領していました。それで、その夜は眠れなかったものです。その後、私は寸暇を惜しんで矢継ぎばやに夢のことを家族に吹聴してまわったのです。まず兄たちに話しましたが、かれらは私を全面的に馬鹿にして、笑い飛ばしたのです。次に、母親や祖母に話しました。それぞれが自分なりの解釈をしました。まず、兄のジュゼッペは次のように言いました。「おまえはヤギや羊などの動物を飼うようになるんだらうよ」。それから、母親は次のように言いました。「司祭になるのかもしれない」。さらに、兄のアントニオはうなりながら次のように言いました。「もしかしたら、強盗の大將になるのかもしれない」。しかし、祖母は、読み書きこそはできなかったが、神学的な知識はじゅうぶんに備わっていました。彼女は「夢など、気にするものじゃない」という最終判断を下しました。こうして、私は祖母に同意しました。しかし、私はその夢を頭のなかから決して追い払うことができませんでした。後に時間が経ってから、この夢の意味がわかる日が来るのだろうか。私は、これらのことを黙っていました。しかも、親戚たちは、ほとんど気にも留めなかったのです。しかし、サレジオ修道会についてローマ教皇に話すために1858年にローマに行ったとき、教皇は私に、超自然的なことを暗示するようなことはすべて話すようにと言われたのです。そのとき初めて、9歳か10歳の時にみた夢について話したのです。教皇は私に、その夢をすべて詳細に書き

出し、ありのままに残すように命じました。つまり、教皇は私に、その夢の詳細をすべて書き記し、それをその修道会の息子たちへの励ましとして残すように命じたのです。

同じ夢は、ドン・ボスコの生涯にわたって何度か繰り返されることになります。最初に見た夢について回想録に記したドン・ボスコ自身が、何年か後になって再び夢を見たことについて何度も語っているからです。実際、彼が9歳のときにみた夢は、決してそれ自体として完結した夢語りなのではなく、むしろドン・ボスコの全生涯に影響をおよぼした逸話群全体の連続性のなかに夢語りの形式を借りて組み込まれているのです。ドン・ボスコ自身が、三つの基本的な夢を結びつけて統合しているからです。それら三つの夢とは、①「1824年の夢」(ベッキでの夢)、②「1844年の夢」(教会の司牧研修所であるコンヴィットでの夢)、そして③「1845年の夢」(パローロ侯爵夫人と働いた時期の夢)のことです。それぞれには、同じ要素が受け継がれている場合もあれば、まったく新しい要素も盛り込まれている場合もあります。私たちにとっては常に、夢の最初の枠組みの流れを理解することが重要となります。しかしながら、新しく加えられた細かい部分やコメントやよびかけは、ドン・ボスコの人生におけるそれぞれの状況に応じて発展させられているのです。こうして、ドン・ボスコがその使命の絶頂期には、もはや幼い頃の9歳のジョヴァンニなどではなく、さまざまな人生経験を積んだ者として夢を理解し直していたことが明らかとなるのです。

三つの夢を組み合わせて理解を深めてから、さらに何年も経った1875年になって、すでに60歳になっていたドン・ボスコはバルベリス師に、次のように語っています。そのとき、すでにドン・ボスコはサレジオ修道会を設立し(1859年12月18日)、キリスト者の助けである聖母マリアの大聖堂を完成させ(1869年4月18日)、キリスト者の助けである聖母マリアの娘たちの修道会をも始めさせ(1872年8月5日)、そして自身で命名した敬虔なサレジオ協力者会をも設立していました(1876年5月9日)。

すでに述べたことですが、この夢についてドン・ボスコが最後に物語ったときに、彼は成熟した大人でした。すでにドン・ボスコは数多くの状況を経験し、数多くの困難に立ち向かい、乗り越えてきたのです。その際、彼は聖母マリアの恩寵と愛情とが少年たちにどのような働きをしたのかを自分の目でながめてきたわけですから。つまり、聖母マリアをとおして明らかとなった神の御はからいによる奇跡を数多くながめてきたのです。「1887年になって、聖心に捧げられた大聖堂の献堂ミサの際に、彼は『やがて、あなたはすべてを理解するようになるでしょう』という、あの最初の夢のなかで預言的に告げられていた声を再び耳にして、喜びのあまり涙を流しました。そのとき、彼は自分がいただいていた無敵の信仰の素晴らしい効果をじゅうぶんに味わったのです」(註8)。

## 2. 歴代の総長たちが引き継いだあらゆる夢を見直そう

### [1. 聖母マリアージョヴァンニ・ボスコ→後継第一代ミケーレ・ルア]

私はミケーレ・ルア師を除く歴代の総長たちが、ドン・ボスコの夢について言及しているという事実に特に感銘を受けています。このドン・ボスコの夢は、私たちの修道会およびサレジオ家族全体を特徴づけるものです。ここではマルコ・ベイ修道士の偉大な研究業績を参照しながら（註9）、自分でも「サレジオらしさ」についてたどってみたいのです。

### [2. 後継第二代パウロ・アルベラ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて二代目となる後継者のパウロ・アルベラ師は [ドン・ボスコがサレジオ会の創立者であり、その後継者の第一代目はドン・ルアで、その後継者としての第二代目がパウロ・アルベラであるという意味です]、神の御はからいによってドン・ボスコに使命が託されることによりヴァルドッコで始まったオラトリオのことを「ドン・ボスコのオラトリオ」と呼んでいます。「ドン・ボスコにとっての最初の、そして長年にわたる唯一の仕事は、祝祭的なオラトリオでした。すなわち、彼の祝祭的なオラトリオは、9歳のときに見た神秘的な夢でかいまみたときに始まり、その後で彼に託された神の御はからいに沿う仕事に取り組む日々においても心を徐々に照らしつつ開花させていった数々の夢で示されたものでした」（註10）。

### [3. 後継第三代フィリッポ・リナルディ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて三代目となる後継者のフィリッポ・リナルディ師は、この夢の最初の100周年を祝う機会を経験しています。その際、彼は修道会全体がこの出来事を祝う恵みを経験できるように努めました。それゆえ、彼は次のように修道会の仲間たちを励ましています。

「私たちの会憲発布を記念する回状において、すでに私は皆さんに対して述べたことを再び繰り返します。親愛なる息子たちよ、ドン・ボスコの最初の夢の100周年を思い出して実行に移しましょう。親愛なる仲間たちよ、私たちの教導のために創立者が書いた記録を一緒に読み直しましょう。私たちを教え導くイエス・キリストの協力者に対して従順についてゆきましょう。そうです、尊敬の念をいただきながら再読し、私たちの心に一字一句を定着させましょう。私たちの召命の超自然的な起源であるとともに、サレジオらしさそのものとしての核心であり、さらにはサレジオらしい具体的な生き方を福音にもとづく視点で記述しているあの記録を、一語一語、自分たちの心に沁み込ませてください。読めば読むほど、9歳の夢の出来事は新たな輝きを増すからです」（註11）。

そして、同じ手紙において、ドン・ボスコが9歳のときにみた夢をとおして、彼が新たな使命に召されたのと同様に、私たちもまた聖母の慈愛深い導きのもとで新たな使命に召されていることを、修道会の兄弟たちに対しても理解させました。聖母は私たちの手を取

り、私たちの働く場を示し、「謙遜で、強く、たくましく生きる」という賜物を身につけるよう、各自の人生に沿った繊細な方法によって私たちを励ましてくださるのです。こうして、私たちは、夢のなかに登場した聖母が幼いジョヴァンニ・ボスコに与えた「謙虚で、強く、たくましく生きなさい」という言葉で命じられる招きが、どのように私たちにも適用されているのかをじゅうぶんに理解するのです。

「私たちもまた、この方法を実践するために必要な手段、すなわち従順さを保つとともに、それにふさわしい知識を身につけるように命じられています。すなわち、従順と知性が重要なのです。私たちは修道者および司祭に向けた養成の期間中、従順と知性を鍛える生活を実践してきました（もしくは、実践しています）。このしあわせな歳月をとおして、聖母は私たちに優しく手を差し伸べ、私たちの将来の仕事の分野を指し示しながら、私たちが『謙虚で、強く、たくましく生きる姿勢』を身につけることができるようにあらゆる方法を用いて励ましてくださいました。それらの三つの性質は、ドン・ボスコのまことの息子に必要な資質だからです。こうして、最初は神のことをまったく知らず、おそらくはすでに悪の犠牲になっていた数え切れないほどの若者たちが、真実に目覚め、いやされ、イエスおよび聖母マリアをほめたたえて祝う喜びを味わう姿を、最終的に私たちもながめることになるのでしょう」（註12）。

さらに、今回の200周年を大いに意義深い形で祝うための励ましとするために、リナルディ師が取り仕切ったローマでの祝典を伝える当時の『サレジオ会報』の内容を紹介しておきましょう。

「5月2日付けの『コリエレ・デ・イタリア』紙には、『夢のため』という見出しが出されています。『夢の理想的な美しさを祝うために、昨日、ローマにあるドン・ボスコ事業所の広い中庭で、何千人もの人びとが一同に会し、ところ狭しとひしめき合っていました。人びとからの羨望のまなざしと拍手喝采に迎えられて、ドン・ボスコの精神を引き継ぐ由緒正しい宣教師のカリエロ枢機卿、ドン・ボスコの後継者であるリナルディ師、ピエトロ・フェデーレ大臣とともに、ドン・ボスコに全身全霊で協力するあらゆる人びとが集まったのです。御祝いされた、この比類なき師は、信仰の光り輝く謙虚さのうちに、あの崇高な夢の光り輝く道を歩んでこられたのです。そこには、教師、軍人、司祭たちなど、さまざまな職業の人びとが集いました。このようなドン・ボスコの弟子たちを始めとして、数多くの少年少女たちがひしめき合って活気に満ちた会場となりました」。

「100年前（今年も聖年であるということも重なっているので、決して忘れもしないことなのですが）に、少年だったドン・ボスコは、甘美で神秘的な夢をみました。そこで、ひとりの御婦人とひとりの男性とが、ドン・ボスコを別の集団のところへ連れて行くのを目の当たりにしたのです。犬と猫の大群でした。しかし、二人の不思議な合図によって、野獣たちはおだやかな小羊の群れに変わったのです」。

「100年後に、その夢は現実のものとなり、華麗で活気に満ちた壮大なものとなりまし

た。もはやあらゆる学校教育や宣教活動の形態ばかりか生活スタイルや祈りの仕方においても、すでに何百万もの人びとの運命に関わっている、神から教会共同体およびイタリアに対して与えられた最も偉大で神聖な人生の教師としてのドン・ボスコを歓迎し、いまでも迎えているすべての人たちがいるからです」(註13)。

#### [4. 後継第四代ピエトロ・リカルドーネ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて四代目となる後継者の**ピエトロ・リカルドーネ師**は、幼いジョヴァンニが9歳のときにみた夢について、祝祭的なオラトリオおよびサレジオの事業全体の最初の苗木として理解しています。その夢を出発点として、数多くの発展があったのです。リカルドーネ師は次のように述べています。

祝祭的なオラトリオおよびサレジオの事業全体の最初の苗木をたどらなければならないことは、間違いないことです。ドン・ボスコの夢にまでさかのぼらなければならないのです。威厳に満ちた気品あふれる女性が、ベッキ村出身の幼い羊飼いに對して「謙遜で、強く、たくましく生きなさい」とよびかけた、あの夢を思い出しましょう。

「これこそが、私たちが世話している子どもたちのためにしなければならないことなのです。ベッキ、モンクッコ、カステルヌオーヴォ、キエリ……。彼は常に、彼方へとつづく遠大な目標に向かって歩いていたのです。1841年12月8日は到着点であるとともに、もうひとつの出発点でもあるのです。ジョヴァンニ・ボスコは、約束の地としてのヴァルドッコのピナルディの小屋に到着するまでに、再び新たな巡礼の旅に出なければならないのです。ここで、最初の情景に戻ると、私たちがながめることになる、あのやわらかい苗木は、次第に人間の予想をはるかに超えて強くなるとともに、空高く伸びてゆくものなのです」(註14)。

リカルドーネ師は、ドン・ボスコによる召命に対する愛情や熱意もまた、9歳のときの夢に由来していることを信じています。

「ドン・ボスコによる召命に対する愛情や熱意は、彼が9歳のときにみた預言的な夢にその最初の起源があります。実際に、その夢をみて以来、ジョヴァンニは司祭になるための勉強を始め、若い人たちの救いのために身を捧げたいと考えようになったからです」(註15)。

#### [5. 後継第五代レナート・ジジョッティ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて五代目となる後継者の**レナート・ジジョッティ師**は、ドン・ボスコにとって「先生」が偉大な贈りものであったことを、特別な方法で強調しています。実際に、幼いジョヴァンニに、とりわけ「導き手」としての「母」という贈りものを与えてくださるのは主なのです。そのことは、次のように表現されています。

「『わたしはあなたに教師を与えましょう。彼女の導きのもとで、あなたは賢くなるこ

とができるからです。彼女なしには、あらゆる知恵は愚かなものに過ぎないのです』。これは最初の夢のなかに登場する、『あなたの母親が一日に三回あいさつをするように教えた女性の息子』による預言的な言葉です。それゆえ、ドン・ボスコに御自分の『母』を、彼の全生涯の苦難に満ちた旅路の師としても、決して誤ることのない『導き手』としても授けたのは、イエス・キリストなのです。私たちサレジオ家族に対して天から授けられたこの特別な贈りものに対して、私たちはいったいどのようにじゅうぶんな感謝を捧げることができるというのでしょうか」(註16)。

こうして、「母」であり、「聖母」であり、「夢に登場する御婦人」としてのマリアは、ドン・ボスコのすべてとなったのでした。このような確信に強くつつみ込まれたジジョッティ師が、あらゆるサレジオ会員たち次のように問いかけたのです。

「聖母は、生まれたばかりの彼を捧げた母親の願いを受け容れ、彼が9歳のときには夢のなかで彼の将来を照らし、その後も彼をあらゆる手段を用いて慰めつづける(夢のなかで、預言をもたらず聖霊の働きとともに、たましいの観想状態における内的な情景において、奇跡をとおして、数えきれないほどの恵みにおいて)とともに助言を授けました。聖母こそがドン・ボスコのすべてなのです。そして、創立者の精神を身につけたいと願うあらゆるサレジオの関係者は、聖母への信心において彼に倣わなければならないのです」(註17)。

#### [6. 後継第六代ルイジ・リッチェリ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて六代目となる後継者のルイジ・リッチェリ師は、9歳のときの夢の意味について、次のような素晴らしい言葉を語っています。つまり、リッチェリ師は、この夢を通してドン・ボスコが神に召されたと実感したがゆえに、この夢がドン・ボスコにとってどれほど重要であったのかを強調しているのです。

「9歳のときの夢。その夢について、ドン・ボスコが『オラトリオの回想録』で次のように書いています。『私の全生涯を通じて……私の心に深く印象づけられたままでした』(MO, 34)。この夢の情景の忘れがたい印象が残りつづけたのは、それが突然の光のように強烈だったことによるでしょう。ドン・ボスコは、幼いサムエルと同じように、夢の情景をながめたのです。ドン・ボスコは、あらゆる場所で、あらゆる時代の若者たちを救う、という使命のために、神から召され、遣わされたと実感したのです」(註18)。

リッチェリ師は、この夢が、ドン・ボスコが、まだ幼すぎたために理解力がじゅうぶんではなかったときにみたものだとして述べています。そのときのドン・ボスコは、まだ幼すぎるがゆえに物事の意味をじゅうぶんにわかりきることができませんでしたが、それにもかかわらず、たましいを救うために生きることの偉大な価値を直感していたのです。この確信は、彼の人生において、彼の心において、彼の精神において、恵みの賜ものとして、ますます明らかな形をなしてゆくように成長したのです。そしてドン・ボスコは、人生にお

けるこの決定的な出来事を通して、将来的には「予防的なシステム」と呼ばれる方法についての初めての大きな洞察を得たのです。「あなたは、腕力によって相手を打ち負かすのではなく、むしろやさしさと愛情によってこそ友だちを得るようにしなければなりません」というよびかけを御婦人の口から聞いたことを、ドン・ボスコは夢の出来事を語る際に記録しています。ですから、私たちは未来永劫、ドン・ボスコと主の御母との尊い関わりについて語り継ぐことができるようになったのです。このことをリチェリ師は、次のように、とても美しく表現しています。

「この夢から出発して、ドン・ボスコとイエスの御母とのきずなは、ますます強められ、将来の使徒の全生涯を特徴づける永久的な協力関係が築かれることになったのです」(註19)。

#### [7. 後継第七代エジディオ・ヴィガノ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて七代目となる後継者の**エジディオ・ヴィガノ師**も、他の総長たちに劣らないほどに感動的な見解を述べています。このような壮大な継続性を鑑みるにつけて、サレジオ家族のあらゆる修道院長たちが卓越した夢の物語を今日もまた読み直し、黙想し、解釈することで、現代の私たちにとって役立つ発想を引き出すことができるのだと、私は考えています。まことに聖霊のいぶきを備えている者であるマリアがジョヴァンニの「教師」であるとともに「導き手」として召命を支えたことを、ヴィガノ師は彼以前のドン・ボスコの他の後継者たちと同様に確認しているのです。

「特に興味深いのは、ドン・ボスコが生涯で何度も繰り返した、わずか9歳のときの有名な夢です。この夢は、ドン・ボスコがその全生涯において非常に重要視したものです。ドン・ボスコがいただいていた信仰の意識において、マリアは彼が人生で果たすべき使命に直接関わる重要な人物として現れたのです。その際、マリアは『羊飼いの女性』としてジョヴァンニの前に現れたのです。マリアは御子の求めに応じて、御子の召命のいぶきを相手に授けつつ導く者となるのです」(註20)。

ジョヴァンニが経験した素晴らしい夢の聖母との出会いの出来事によって、彼はマリアと非常に個人的な関わりを築くことができたのです。ドン・ボスコは、その生涯を通して、たびたびマリアからの非常に特別で偉大な愛情を親しく経験することになったのです。

#### [8. 後継第八代ファン・エドムンド・ヴェッキ]

ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて八代目となる後継者の**ファン・エドムンド・ヴェッキ師**は、ドン・ボスコが幼い子どもたちのために遣わされたことを確信していたように、ドン・ボスコもまた聖母マリアとの特別な関わりを確信していたと述べています。自分が若者たちのために遣わされたのだと確信していたドン・ボスコは、すべてを若者たちという神聖な目的に集中させつづけたのです。ドン・ボスコが『ドン・ボスコの回想録』

のなかで自分の生涯を語っているのは、次のとおりです。

「主は、彼を少年たちの世話をするようにお遣わしになりました。それゆえ、彼は他の仕事を減らして、少年たちのために身を整えなければなりません」(註 21)。彼は主の道具であり、彼の全生涯はこの召命および使命によって示されたものであると確信していました。ドン・ボスコに関するもうひとりの偉大な専門家もこのことを認めているほどです。

『特別な使命を果たすための主の道具であるという信念は、彼の人間性の奥底に深く根差した堅固なものでした。それゆえに彼は聖書のよびかけを生きるしもべであるとともに、神の御心から決して逃れることのできない預言者の特徴としての信頼の姿勢を心の奥底に保っていたのです』(註 22)。

#### [9. 後継第九代パスクアル・チャーベス]

最後に、ドン・ボスコの次のドン・ルアから数えて九代目となる後継者の**パスクアル・チャーベス師**が公表した数ある文書のなかで特に私の心をゆさぶる文章を書いているので、それを紹介しておきましょう。それは、神の恵みによって、幼いジョヴァンニに寄り添った実母のマンマ・マルゲリータの姿に対する賞讃の言葉です。マルゲリータは、幼いジョヴァンニが 9 歳のときにみた夢のなかで、主と聖母マリアとが息子を非常に特別な召命へと導いていたことを、神の恵みに支えられて直感しつつ解釈することによって、幼いわが子に寄り添うことができたのです。それこそが、ほんものの「サレジアンとしての教育者の姿」なのです。

「マンマ・マルゲリータが子どもたちのなかに秘められた特別な可能性を見だし、その可能性を引き出すことができたのは、この教育的な手腕のおかげでした。彼女は、子どもたちのなかに秘められた特別な可能性を見だし、それを明るみに出し、伸ばし、目にみえる形で子どもたち自身に知らせることができたのです。特に、彼女の最も傑出した子どもであるジョヴァンニに対して目覚ましい助けを授けたのでした。そのマンマ・マルゲリータにおいて、常にキリスト教的な指導を行うほどの『母親としての責任感』に対する明確な意識と自覚を発見することは、あまりにも印象的なことでしょう。マルゲリータが亡くなるまで、子どもたちの天職について、常に自覚していたことは驚くべきことなのでしょう！

幼いジョヴァンニが 9 歳のときにみた夢が、彼の将来について数多くのことを明らかにしたとすれば、そのことはマンマ・マルゲリータによるところが大きいです。最初に次のような解釈を思いついたのはマルゲリータだったからです。『おそらく、あなたは司祭になるでしょうよ』。そして数年後に、自分たちの家庭環境が、ジョヴァンニの義理の兄のアントニオの敵対心によって、ジョヴァンニの成長にとって最悪の状況となっていることに気づいたマルゲリータは大切な末子をモンクッコのモリアの農場で労働者として働かせるといふ犠牲を払ったのです。つまり、母親は家から遠く離れた土地に末子を奉公に出し

て働かせることにしたのです。しかし、彼女は、家族の亀裂を避けるためだけでなく、ジョヴァンニの安全な成長を最優先するがために大きな犠牲を払って家から出発させたのです。このときの経験が、ジョヴァンニをして『サレジオらしい教育者』にまで成長させる神の御はからいにもとづく恵みを受けることにつながったのです」(註23)。

### 3. 預言的な夢——ドン・ボスコの家族のカリスマにおける貴重な宝石

前の項目で、フィリッポ・リナルディ師がどのようにしてサレジオ家族の一人ひとりを招いたのかをながめました。つまり、当時のキリスト者の助けなる聖母マリアの娘たち、サレジオ協力者会の者たち、キリスト者の助けなる聖母マリアの信心会の者たち、さらには歴代の総長たちに与えた影響をたどりました。その夢の記録を読み、理解し、観想するにつけて、独特なひびきが心にもたらされることを実感させられることでしょう。そのことに、疑いはありません。たしかに、これまで夢に関して書かれてきたあらゆる研究において、見解が一致していたからです。

たとえば、歴史批評的な研究をするにせよ、サレジオ会の霊性についての考察を積み重ねるにせよ、教育的な研究や司牧的な解釈をまとめるにせよ、この夢が単なる夢以上のものであることを認識するという点で、これまであらゆる分野の研究を通して書かれたすべてのものにおいて、見解が一致していたのです。この夢は単なる夢以上のものです。実際に、この夢には非常に数多くのカリスマ的な要素が含まれておりますので、私はあえてこの夢を「私たちのカリスマと司牧上の貴重な宝石」と呼びたいと思います。私はいま、次のことを強調しておきたいのです。実に、この夢は、ドン・ボスコの家族にとっての何らの過不足もない、まことの道先案内の地図なのです。

#### 1.1. 夢をみる

いま、まず、どこに注目すべきなのでしょう。まず第一に、**夢そのものを**ながめることが重要です。その夢にはカリスマ的な豊かさがあるからです。すでに述べたように、一言一句の過不足などはなく、たしかに欠けているものは何もないのです。ドン・ボスコがこの夢を書き留めたのは、この夢が「**単なる普通の夢**」[a]などではなく、むしろ彼の「**全生涯をいろどる特別な夢**」[the]であるという事実を私たちに伝えるためでした。このことは、最初に夢をみた当時は、まだ子どもだった彼には想像もできなかったことです。実際に、ドン・ボスコは60歳近くになったときに、自分の修道会に歴史的で精神的な基盤を与えなければならない、という課題に見舞われたのです。つまり、ドン・ボスコは修道会の正統性を保証するために、神の計画によって修道会が始まったことを想起することによって、修道会そのものに歴史的で精神的な基盤を与えるという課題に取り組まざるを得なくなったのです。そのために、青少年たちを救う新たな時代の道具としての「オラトリオを基盤とする修道会」が神の意志にもとづいて動き始めた組織であることを確証すべく、

その発祥や発展や目的や方法について、後継者たちに「語っておくこと」が急務となったのです。果たして他の方法があると言うのでしょうか（註24）。実際に、『オラトリオの回想録』の中でドン・ボスコは次のように語っている。実際、ドン・ボスコが夢を語る『オラトリオの回想録』そのものが、彼の全生涯の物語であるとともにオラトリオや修道会のなかで展開された夢にほかならないのです。だからこそ、彼は原稿の序文で次のように述べているのです。

「それゆえ私は、いま、聖フランシスコ・サレジオ会が神の御計画にもとづいて託されている仕事にとって、この作品が何らかのかたちでの光となり、あるいは役立つことができるかもしれないと考えて、個人的な夢の出来事の秘密の詳細を文章として記そうとしているのです」（註25）。そして、「さらに、この年代記は、いったいどのような目的のために役立つのでしょうか。この年代記は、過去から学ぶことによって、将来起こりうる諸問題を克服するための心構えを定めるための記録なのです。神御自身が常に私たちの導き手であったことを知らせることになるからです。私の後継者たちにとっても、創立の父の冒険を読むことができるようになります。しかも、将来、私が神によって天に召されたときに、後継者たちはこの年代記を特に熱心に読むに違いないのです」（註26）。

『オラトリオの回想録』で語られる物語（その一部分である「9歳のときの夢」）は、非常に重要なものです。特に「9歳のときの夢」には、サレジオ会研究の専門家たちが長年にわたってさまざまな角度から生涯をかけて研究してきたほど重大な意味があります。実り豊かで注目すべき研究の実例としては、サレジオ会研究を教育学の視点で深めた偉大な研究者としてのピエトロ・ブライド師が数十年にわたって、さまざまな成果をとおして強調している点です。それは、「創立者が使徒であるとともに教育者である自分の修道会の会員に残した啓発的な物語」という要点です。使徒であるとともに教育者であった彼の仕事や生活様式を、彼の指示や方針や教えに従って永続させるために物語を示さなければならなかった、というのです。あるいは、「実際よりも『神学の要素』が盛り込まれた教育的な弁論史」（1965年）というよび方も提案されています。おそらく、「ドン・ボスコが最も長い時間をかけて熟考し、望んでいた、たましいをゆさぶるほどに『計算し尽くされた文書』（1989年）なのでしょう。ドン・ボスコが書いた「教育学および霊性の教科書であるとともに、明らかに『オラトリオの視点から語られている物語』（1999年）ともよばれています。あるいは、「たとえ話とメッセージ」が「歴史」よりも先に、「歴史よりも上位にある」文章である、また、人間的な諸問題のまっただなかに生ずる神の働きを説明するために、「歴史的な描写の仕方に先んじて」、「歴史的な描写の仕方よりも優先的なかたちで」、「たとえ話やよびかけ」に価値を置くような文章の書き方もあるのです。そのようにするのは、「オラトリオに所属する数多くの弟子たちをよろこびで満たすとともに新たなる創造的なわざに招くためでもあり、彼らの『オラトリオ的な人間性』にもとづく本来的な生き方を再確認させるため」（1999年）でもあるわけですから（註27）。

私が言及するこの宝石の貴重な石のひとつは、私たちがサレジオの心をいだいて夢の世界に入ることを可能にするものです。サレジオの心をいだいて、この夢の世界に入る私たちは、キリスト教とサレジオの歩みとを問わず、またドン・ボスコの家族のなかで、心から次のように問われるのです。「果たして、私たちには学ぶ準備ができているのでしょうか、果たして私たちの人生に寄り添ってくださる神によって驚かされることを望んでいるのでしょうか」と。ドン・ボスコの全生涯を導かれた神が、私たちの全生涯にも付き合ってくださいという現実には驚かされ、私たち自身が神の息子や娘であるかのように実感することを果たして望んでいるのでしょうか。そして、私たちの父であるドン・ボスコの姿からにじみでる、計り知れないほどの「父親らしさ」を目の当たりにして、わたしたち自身がドン・ボスコの息子や娘であるかのように実感することが果たしてできるのでしょうか。なぜなら、以下のとおりだからです。

- (1) **信仰をいだくこと。**——なぜなら、もしも私たちが信じる者とはならず、神が歴史のなかで、ドン・ボスコの人生の歩みのなかで、そして一人ひとりの人生のなかで働いておられることを確信しないとすれば、私たちは『オラトリオの回想録』をほとんど、あるいはみじんも理解できはしないでしょう。その記録は、単に「美しい物語」で終わることになるでしょう。

- (2) **子であること。**——なぜなら、もしも私たちが息子や娘にならないとすれば、ドン・ボスコが『オラトリオの回想録』を書くことで意図していた「父親らしさ」に自分を同調させることは決してできないでしょう。

- (3) **弟子であること。**——なぜなら、もしも私たちが学ぶ用意のある弟子とならないとするならば、私たちはほんとうの意味で『オラトリオの回想録』そのものや「夢」の精神を受け容れることはできないでしょう。

これら三つの最初の心構え ((1)信仰をいだくこと、(2)子であること、(3)弟子であること) は、オラトリオの精神を理解し、それを実践するために「不可欠な鍵」なのです。つまり、ドン・ボスコが語った霊的な遺産を理解し、自分のものとするために「不可欠な鍵」なのです。ドン・ボスコは、彼の生涯に生じ、彼に永遠にしるしと啓示とを与えた「夢」の出来事を、次のように説明しています。「彼のサレジオ会員が恩寵によって彼の家族の一員であると感じ、その一員である私たち全員を深く助ける遺産となることを望んだのです」。

## 1.2. 夢の重要な登場人物である若者たち……

夢をみた最初の瞬間から、幼いジョヴァンニ・ボスコに託された「オラトリオ的な使命」は明白でした。たとえ彼がそれをどのように実行し、どのように表現すればよいのかがわ

からなかったとしても。よくながめればわかるように、その光景は、ジョヴァンニの夢のなかで、たしかにひしめき合う若者たちで満たされています。したがって、**若者たち**こそが夢の中心人物なのであり、たとえ彼らが言葉を発しなくとも、あらゆることは彼らを中心に展開するのだ、と言うことは可能だと思います。それに加えて、「天国の登場人物たち自身と若きジョヴァンニ・ボスコとは、若者たちのおかげで、彼らのためにそこにいるのです。夢は、あらゆる若者たちのためにあるのです。もし私たちがこの夢から若者たちを除外するのならば、私たちの使命にとって重要なものは何も残らないことでそう。

しかし、興味深いことは、若者たちは、ある枠組みのなかに被写体を固定する写真のような存在の仕方をしていないという点です。若者たちは常に動き、活動しているからです。まるで、オオカミのように。攻撃的であるときも、おたがいに我慢できないときも、そして、夢のなかに現われた御婦人が若いジョヴァンニに対してやさしさと愛情でオオカミに接するように望んだ後で、変身したときでさえも。彼らは穏やかで、友好的で、温かみのある、まるで子羊のような若者になります。そして温かさがみなぎっているのです。このことが、夢のなかで生じる最も重要なことであり、ドン・ボスコ自身が学んだことでもあるのです。彼は、相手の変容する過程が常に生じつづけるものであることを発見しました。それは、まさに「復活祭としての運動」とよぶにふさわしい出来事なのです。オオカミが子羊に変容しましたが、その事態を最近の言葉づかいで言うならば、「イエスとマリアを讃える青少年たちの共同体へと変容すること」と述べることができるでしょう。言わば、回心と変容をもたらす「復活をともなう祝祭の運動」です。イエスとマリアをほめたたえる祝福に満たされた運動は、たしかに夢の本質的かつ中心的な要素であるように、私には思えてならないのです。

### 1.3……ここが、召し出しのよびかけが明らかとなる現場なのです

「ここが、あなたの仕事の現場です。謙遜で、強く、たくましく生きなさい。そして、この動物たちに起こっていることは、あなたが私の子どもたちのためにしなければならないことなのです」(註28)。

夢のなかで生ずることは、何よりもよびかけなのであり、招きであり、達成することが不可能におもえるほどの召し出しなのです。若いジョヴァンニ・ボスコは疲れて目を覚まし、泣いてさえたのです。たとえ神からのよびかけ（夢のなかに現われた威厳のある姿の人物はイエスです）であったとしても、そのようなよびかけが指し示す目標は予測不可能であり、うろたえるしかないものです。このよびかけは、夢のなかでは大変特別なもので、独特の豊かさで満たされています。というのも、彼の年齢、父親と死別していること、家に財産がほとんどないこと、貧しさがつづいていること、家庭内の問題が絶えないこと、異母兄弟とのけんかが激しいこと、などが原因であるのです。異母兄のアントニオとのいさかきが激しく、遠距離のために学校に通うのが困難であることも危機的です。ジョヴァンニにとって、畑を耕し、作物の世話をする以外には、将来の道はないのです。畑を耕し、家畜

の世話をするだけの人生と言え、私たちがさえ、そこにおいて、あの夢の内容は実現不可能なように思えてくるものなのかもしれません。あまりにも遠く離れた夢である場合、その夢はおそらく他の誰かのために運命づけられたものでしかないでしょう。しかし、彼にとってはそうではありませんでした。ところがジョヴァンニの親族も祖母の言葉を裏づけるように、同じように解釈しています。「『夢に注意を払いなさい』という祖母の言葉に裏打ちされているからです」(註29)。

しかしながら、この困難な状況こそが、ドン・ボスコ（このときは、まだ幼いジョヴァンニでした）を非常に人間的で、助けを必要としながらも、したたかで、情熱的な人物にして仕立てあげているのです。彼の意志の強さや性格や気質は不屈の精神に貫かれており、母親であるマンマ・マルゲリータの決意によって支えられており、この母親とジョヴァンニ自身がいっしょにだいていた深い信仰が、あらゆることを可能にしたのです。夢は、いつもそこにある、ということ、彼は自分のつらい人生を通して発見したのです。夢は決して魔法ではないですし、妖精のようにふわふわしたものでもなければ、変更不可能な宿命などでもありません。しかし、夢は、意味づけと要求と犠牲に満ちた人生のまっただなかで生じるとともに、夢を日々発見しつつ生きようとする信仰と希望でもあるのです。

夢のなかで、威厳に満ちた風貌の大変立派な男性が現れ、ジョヴァンニに話しかけ、質問し、その手を握りました。つまりイエス・キリストはジョヴァンニを母である聖母の手に委ねたのでした。ジョヴァンニは間違いなく使命を帯びて遣わされたのです。それは教育者および牧者としての使命であり、やさしさや愛情という手段を用いるべきことも示されています。ここにおいて、彼が受けた召し出しへの応え方の実例があります。

「幼い頃から神の霊の働きに忠実に従っていたジョヴァンニは、神の御計画によって授けられた分野で働き始めました。彼は、まだ10歳にもなっていませんでしたが、ムリアルド村の仲間うちではすでに使徒としての役目を果たしていたのです。1825年に、幼いジョヴァンニが自分の年齢および学歴に見合った手段を用いて始めた祝祭的な雰囲気のアラトリオがつづいたのも見事なものです。驚異的な記憶力を備え、書物を愛し、定期的に説教を聴いていたジョヴァンニは、あらゆるものごとや指示や事実や具体例を大切に心に留めて、それらを幼い聴衆たちに対して繰り返すことで有意義な内容を伝えたのです。皆を愉しませる彼のリクレーシヨンの腕前を称讃し、子ども向けの話を聞こうとして多数の人びとが殺到しました。それによって人びとの心のなかに美德への愛情を見事に植えつけることができたのです」(註30)。

#### 1.4. 幼いジョヴァンニの夢およびドン・ボスコの生涯に永遠に刻みこまれました御婦人としてのマリア

いまや私たちは、夢の核心部に位置する、聖母による「母親としての仲介」(名前の秘義

と結びついています) の出来事に迫ろうとしています。マリアはジョヴァンニ・ボスコにとって、彼の母であるとともに、聖母に対して一日に三度あいさつする人 [マンマ・マルゲリータ] の母親でもあるのです。マリアはあらゆる人間にとっての憩いの場をもたらします。

『私はあなたに先生を授けましょう。彼女の指導のもとで、あなたは賢くなることができます。彼女なしには、あらゆる知恵でさえも愚かなものです』。実際に、マリアこそが、ジョヴァンニが働かなければならない分野とその方法を教えてくれるのです。『ここが、あなたの仕事の現場ですよ。謙遜で、強く、たくましくなりなさい』。マリアは新しいカリスマを誕生させるために、最初の一声をかけるのです。カリスマの原初の光を聖霊から受けなければならない創立者に、主は御自身の母親であり、聖霊降臨の際の聖母であり、無原罪の聖母を授けるのです。恵みに満ちた『彼女』だけが、あらゆるカリスマを理解することができるからです。つまり、あらゆる言語を知り、それらを自分の言葉として流暢に話す者としての『恵みに満ちた彼女』だけが、心の底からあらゆるカリスマを理解するのです(註 31)。それはあたかも、夢に登場した男性が幼いジョヴァンニ・ボスコに次のように言ったかのようにです。

『これから、彼女と協力して進みなさい』。ここで、ジョヴァンニがマリアを選んだのではなく、むしろマリアがジョヴァンニを選んだことに注目しましょう。マリアは、御子の求めに応じて、御子から召し出しを霊的に理解する者として、教師となったのです(註 32)。

このような「女性的で母性的なマリアの次元」は、おそらくこの夢を理解する際に最も困難なことがらのひとつなのです。私たちが、この夢を穏やかにながめるときに、マリアの次元は美しいものに様変わりするのです。イエス御自身がジョヴァンニに教師である母親を授けるのであり、ジョヴァンニは「マリアという母に対してイエスの名前を尋ねなければならない」のです。ジョヴァンニは「彼女子どもたち」とともに働かなければならず、人生の夢が継続することを見守るのは「彼女」なのです。ジョヴァンニがほんとうにすべてを理解するその瞬間まで。サレジオのカリスマが、最も貧しい若者たち、最も困難な状況にある若者たちに代わって、次のように言おうとすることには、大きな意図があります。

最も貧しい若者たち、最も恵まれない若者たち、最も愛情に欠けている若者たちのために、サレジオのカリスマにおいては、彼らを「親切に」しかも「優しく」迎えるという役目があります。あの「マリアのような次元」と同様に、「親切に」しかも「優しさ」と「愛情」をいさぎながら彼らに接するという姿勢は、このカリスマに生きたいと願う者にとって欠くことのできない要素なのです。聖母は「カリスマの知恵」を養成することに関

わっているのです。だからこそ、サレジオのカリスマにおいて、次のような人がいることを理解するのは難しいのです。マリアのような姿勢を置き去りにして前進しようとする人（個人、グループ、組織）がいることを理解しがたく感じるのはそのためです。ナザレのマリアがいなければ、私たちはサレジオのカリスマではなく、別のカリスマについて語るようになってしまうでしょう。しかも、ドン・ボスコの息子や娘たちについても物語ることはできないでしょう。ジジョッティ師は、私たちが取り組んでいる夢の研究について、次のように見事に語っています。

「私は、あらゆるサレジオ会員たちに、聖人の全生涯を天の光で照らし、それゆえ聖人に議論の余地のないほどの価値を与えるこの非常に重要な事実を説明したいのです。

「聖母は、生まれたばかりの彼が母親から奉献されたときに受け容れ、彼が 9 歳のときには夢のなかで将来を照らし、その後も彼を慰めつつも助言するために戻って来られました。聖母は、夢のなかでも、預言をもたらす聖霊の働きにおいても、彼の心の底で繰り広げられるたましいの平安による内的な情景をとおしても、ありとあらゆる手段を用いて関わったのです。ドン・ボスコにとって聖母はすべてです。創立者の精神を身につけたいと願うサレジオ会員たちは、献身する際に彼を模倣しなければならないのです」(註 33)。

### 1.5. 聖霊に従順で、神の御計画に信頼すること

たしかに学ぶべきことは、あまりにも多いのです。謙遜で、強く、たくましく生きるということは、その先に生じることがらに備えるということでもあります。ジョヴァンニ・ボスコは従順でなければならず、師の知恵に忠実でなければならないのです。彼は、ものごとが変容する過程をながめることができるように、ものごとの意味を見つけ出すことを学ばなければならないのです。この若者たちとともに歩む道、つまり旅が、人生の深まりへと向かうとともに、夢に登場する主との出会いや聖母との出会いにまでつながっていることを理解しなければならないのです。まさにジョヴァンニ・ボスコは、イエスとマリアの生き方に到達するための道筋を発見したのです。

神への従順さつまり聖霊に対する従順が課題となるのです。マリアが「なりゆきにまかせる人」であるように、ほかならぬ神が思い、夢みていることを自分の身に生じさせてくださる方であり、その「フィアット」[「おおせのままに」という賛同の応え]を神に宣言するほどであるように生きることが重要なのです。ドン・ボスコの家族としてのサレジオ関連のあらゆる所属者たち、つまりサレジオ会員たち、キリスト者の助けである聖母マリアの娘たち、あらゆるサレジオ協力者会員たち、キリスト者の助けである聖母マリアの信心会の者たちもまた、まさにこの聖霊への従順という姿勢を学ばなければならないのです。聖霊に対して従順であること。——私は、この姿勢が、あらゆるサレジオの活動形態の土台となるばかりではなく、修道会における初期養成や継続的な生涯養成のあらゆる段階におい

て、具体化されて実りをもたらすとともに、いのちを活性化させるものとなることを望んでいます。その際に、次のことを決して忘れてはなりません。「養成者」は、マリアのように、「聖霊によって養成される最初の者」となるべきであることを決して忘れてはならないのです。この夢は、他のいかなる要素や他のいかなる現実と同様に、私が次のように表現できると信じているものを提供してくれるのです。

カリスマの遺伝子 (DNA) にとっては「譲れない手がかり」あるいは「原理」となる「夢」こそが、私たちの生き方を読み解き、識別し、心を重ね合わせて行動するための助けとなるのです。

これこそが共同体の課題であることを決して忘れてはならないのです。まさに、私たちは「協働しなければならない」(シノダリー) のです。サレジオオ家族としても、私たちは最近の教会共同体全体における協働的な協議 (シノダル・ワーク) の動向にも歩調を合わせて進まなければならないのです。

サレジオ家族の一員として、ドン・ボスコの 9 歳のときの夢を振り返りつつ共に歩むことは、「神の御はからいに身をゆだねたドン・ボスコの姿勢」を強調することでもあります。彼にとって、まさに夢そのものが神の御計画の働きそのものだったのです。これこそが根本的な確信であり、人生の根本的な選択でもあり、「ドン・ボスコのたましいの本質」であるとともに、彼の核心であり、心の最も深いところに秘められたその人らしさなのでした。ドン・ボスコが母親から学んだ、神の御はからいに身をゆだねる姿勢こそが決定的な出来事であったことは、もはや疑い得ないのです。このようなゆだね方こそが、サレジオ会の霊性が継続されてゆくことを保証するものとなっていなければなりません。神へと向かう、まったく自己放棄として、神への信頼を徹底的に生きることが重要となります。ドン・ボスコが愛することを学んだ神こそが信頼できる御方だからです。1876年2月2日に、ドン・ボスコがサレジオ会の管区長たちを前にして次のように述べたほどなのです。

「他の使徒的な活動修道会や荘厳誓願にもとづく修道会も、その創立の際に飛躍的な弾みをもたらしつつ確実な組織づくりを保証するような聖霊の働きによる何らかのいぶきや霊的な情景によって支えられていたのです。しかしながら、たいていの場合、そのような事実の一つか二つで終わっているものです。ところが、私たちのあいだでは事情がまったく異なっています。私たちにとっては、いままで知られていなかったようなことは何ひとつないと言えるからです。たとえば、私たちにとっては、これから起こるであろうあらゆることを、それらが起こるよりも前に、すでに細かく正確に書き留めることができるからなのです。超自然的な事実の助けなしに、修道会が始まりの第一歩を踏み出すことはできないのです。主からの命令にもとづかないような変化や改良や拡大などはまったくありえ

ないのです……」(註34)。

### 1.6.しかし「打ち叩くことによらずに」——「優しさ」と「相手を育む忍耐」のわざ

その「夢」は過去の出来事を語るばかりでなく、現在、つまり極めて時事的な今日をも語っているものなのです。夢のなかで聖母が幼いジョヴァンニにささやいた「打ち叩くことによらずに」という言葉は、現代に生きる私たちの姿勢にも問いを投げかけるとともに、私たちサレジオの関係者による若者たちの教育のあり方をこれまで以上に考えさせるものでもあるのです。なぜならば、憎しみや暴力の連鎖が収まらないまま増えてつづけているからです。私たちが生きているこの世界は、ますます暴力的になっています。私たちのような若者たちの教育者や福音宣教者は、夢のなかでジョヴァンニを苦しめたものや、私たちが苦しめているものに対して取って代わる努力をつづけなければなりません」。パスクアル・チャーベス名誉総長が『2012年度のスtrenナ』で次のように述べているとおりです(註35)。「私たちは間違いなく、無関心主義、倫理的相対主義、物や経験の価値を破壊する消費主義、正しいことがらからずれた主義主張などの、羊の群れを食い尽くそうとする『オオカミ』のような暴力に対して毅然として立ち向かわなければならないのです」。

このよびかけは、幼いジョヴァンニ(私たちの父であるとともに教師であった、後のドン・ボスコ)が受け取ったときと同じように、今日の私たちに対しても通用するよびかけなのだ、私は考えています。

「打ち叩くことによらずに」と言う場合に、それは「絶対にやってはいけない」ということを述べているのです。それはあまりにも明らか過ぎることなのですが、まさにジョヴァンニ・ボスコが夢のなかで受けた唯一の矯正すべきことがら——非難されるべきことがら——だったのです。そして何よりも第一に、このよびかけは私たちにとっての確信でもあるわけです。つまり、武力や暴力の道は、カリスマを正しい方向に導くものにはなり得ないという確信が私たちにはあるのです。夢のなかで登場した「打ち叩くこと」には、今日あまりにもたくさん種類があります。私たちを取り囲むあらゆる暴力の数々を禁止するとともに私たちの教育活動のなかから徹底的に締め出さなければなりません。多かれ少なかれ、微妙な暴力の形態を数多くを読み解き、考え抜き、それらの酷さを把握することに、私は関心を払ってきました。あらゆる暴力は、私たちの教育や司牧活動から早々と締め出さなければならず、サレジオ家族のカリスマ的な世界観からも追放されなければならないものなのです。

「打ち叩くことによらずに」とは、暴力を決して正当化することなく、むしろあらゆる暴力と意識的に闘うことを意味しています。

- (1)身体を傷つける暴力（押す、蹴る、平手打ちする、圧迫する、固定する、物を投げつけること）。

- (2)自尊心を傷つける心理的で言語的な暴力。相手を侮辱し、失格とみなし、孤立させ、敬意なしに監視し、管理する暴力。暴力や心理的虐待。自分が正直に考えていることが、常に人と異なっているから間違っていると相手に思い込ませることや未熟であるとさえ思わせるような暴力。

- (3)感情的で性的な暴力は、身体、心、そして最も親密な愛情を傷つけるものです。苦痛の消えない痕跡を残し、言葉や文書で、わいせつ、ハラスメント、嫌がらせを押しつける視線やサインで表現される。わいせつ、いやがらせ、いじめ、虐待のことでもある。

- (4)経済的な暴力とは、自分のものであったり、善を行うために使われるはずのお金が、差し押さえられたり、横領されたりして盗まれることである。

- (5)暴力はまた、インターネットを通じて行われる嫌がらせによるサイバー上の暴力や「ネット上のいじめ」でもあり、インターネット上のウェブサイトやブログにおけるさまざまなテキストおよび電子メールでのよびかけやビデオ映像などを通じて行われる嫌がらせとしても成り立ちます。

- (6)社会的な排除から生じる暴力は、人びとや学生たちもしくは青少年たちが排除されたり、公然と辱められたりすることであり、彼らの尊厳が踏みにじられることです。

不当な扱いを特徴とする暴力によって、脅迫や操作がまかりとおり、相手の評価を下げるようなふるまいが横行し、拒絶・否定・疑い・屈辱・侮辱・見下し・嘲笑・無関心がつづきます。

このような、相手のいのちを脅かす状況に対する解毒剤が私たちの使徒職のカリスマに備わっていることは間違いのないことです。ドン・ボスコが司牧上の天才だったからです。「一方、ジョヴァンニ・ボスコの最初の夢にマリアが介入されたことが、教会共同体において私たちを特徴づける『使徒的な天才』としての素質が初めて創り出されたことを思い出しましょう。私たちにとっての司牧上の天才的な働きを特徴づける企画としての『予防教育のシステム』に焦点を合わせて、ごいっしょに考えてみませんか」(註36)。

### 1.7. 御婦人としての「彼女」——教師であり母である御方

夢に登場した御婦人は、自らを教師であるとともに母として現わしました。彼女は、夢のなかで現れた威厳に満ちた男性の母であるとともに幼いジョヴァンニの母にもなったの

で二重の意味での母なのです。彼女はジョヴァンニの手を取って次のように言いました。

■「ながめなさい」。——ものごとのながめかたを知ることがどれほど重要なことであるのでしょうか。若者たちのありのままの現実を「ながめる」ことができないとき、それはどれほど深刻なことであるのでしょうか。若者たちのなかにある最もゆるぎないもの、さらに最も悲劇的で痛みをとまなうものをながめることができないとき、それはどれほどまでに深刻なことなのでしょうか。「まるで輝く星々で覆われているかのように、全身に輝きを放つ外套を身にまとった、堂々とした容貌の女性」から発せられた「ながめなさい」という最初のひと声をジョヴァンニが聞いたのでした。

「ながめる」というひとつの動詞について、あまり細かく詮索したくはないのですが、私には次のように思えてならないのです。「ながめること」によって察知される「予防的なきざし」は、実際に、私たちの父がたどらなければならない道そのものを示しているのだ、と。経験を通して学ぶことこそが、何よりも重要なものなのです。ドン・ボスコの人生において、ものごとを自分の目でたしかめることが、どれほど重要なことなのでしょうか……。トリノに到着したときに、ドン・ボスコがながめたもの、いや、むしろカファッソがドン・ボスコにもものごとの本質をながめさせようとして助けたことが、私たちの使命を生じさせているのです。それは、彼があらゆる少年たちをどのようにながめているか、ということなのです。ドン・ボスコはサヴィオをながめ、マゴーネをながめ、カリエロをながめ、ルアをながめ、ともかく数多くの少年たちのありのままをながめたのですが、さらにその後もつづく奇跡の始まりとして、カファッソから指導された「ながめること」こそが意味をもつのです。キエリの博物館には、ドン・ボスコの目とそのまなざしとを表現した彫刻が1988年に設置されました。彼のまなざしには独特なものがありますが、おそらく、聖母によって語られたその「まなざし」の独特さを反映しているからなのでしょう。

私たちにとって「アシステンツァ」という、相手に対する最も基本的な支えという言葉への明確な言及の始まりを見つけ出すことができるのは、まさに「ながめること」をめぐる夢の記録なのです。

そして、私たちは皆、相手を「ながめること」がどれほど必要なものなのかをじゅうぶんに知っているはずなのです。しかも、幼いジョヴァンニはベッキのあの夢の現場にばかりとどまっているわけにもゆかず、そこからはるか彼方へと遠ざかり、むしろ知らず知らずのうちに彼は「経験すること」を積み重ねることによって「ながめること」の重要性を身につけたのです。特に、極度の困難や疲労の中で、彼は学んだのです。

「ながめること」によって、自分独りの立場にこだわる閉じこもりの状態は他者に向け

て幅広く開かれることになり、自分の狭い視野をはるかに超えた何ものかを大胆に把握できるようにになります。自分の狭い予想をはるかに超えてゆくことが新たな視野を得るための誘いとなり、挑戦となり、挑発となり、訴えとなるとともに人生の導きとなるのです。なぜなら「ながめること」が、ジョヴァンニが働いてゆく際に若者たちとの全身全霊を賭けてすべてを捧げ尽くす関わりの姿勢を要求するからです。これは、彼の後継者たちやサレジオ会の教育活動全体における「生活環境」の重要性を示すことでもあるのです。

心の内面の深まりと静けさという本質的な配慮を損なうものは何もありません。私たちは高いレベルにまで成長することを求められています。私たちのまなざしが、神の秘義に向かって注がれようとしているときでさえも、同時に思わぬ危機に見舞われる場合もあります。しかし、「ある人がエルサレムからエリコに下ってゆく途中、盗賊どもの手中に落ちた」(ルカ 10:30) 場合でも、「ながめること」によって危機を脱することになるのです。何よりも、「ながめること」が、幼少期から生涯の終わりに至るまで、常にドン・ボスコという人物を特徴づけるものでした。

■「学びましょう」。—— 謙遜で、強く、たくましくなりましょう。なぜなら、数多くのことに直面するときには単純さが必要だからです。傲慢; 人生で直面しなければならない多くのことに直面したときの強さ。そしてそのようなものから立ち直るための活力、あるいは決して落ち込まない能力、何かのときに「がっくりと肩を落とさないような能力」。あなたは何かができないようです。

興味深いのは、幼いジョヴァンニの人がらを「やわらかく(柔和に)」「(謙遜で、強く、たくましく)しているのは、次のような出来事であることです。神の御はからい(マリアによる導き)が旅の途上で明らかとなったこと(ひとつの経験を積んだこと)です。たとえば、夢の後で、1828年2月(そのとき、彼はまだ12歳でした)のあるときに、母親のマルガリータは息子のアントニオとのいざこざのため、ジョヴァンニを家から追い出さざるを得なくなりました。夕暮れどきに、ジョヴァンニはモリアの農家に到着します。そこで、彼は同情されるというよりは、むしろ歓迎されたのです。モリアにとっては、働いてくれる誰かがほんとうに必要だったからです。モリアの家族が牛飼いの仕事をしてくれる人材を探していたのは冬のことではありませんでした。いずれにせよ、農家はジョヴァンニのふるさとからは非常に遠い場所にあるのですが、同時にモンクッコの町には非常に近い便利な場所にありました。ここにはトリノ教区に所属する高名な教区司祭の一人であったフランチェスコ・コッティーノ師がいました(サレジオ会の文献では、現在に至るまで、この人物についてはほとんど何も語られていませんが)。ジョヴァンニは毎週日曜日にその教区司祭と面談することになりました。ジョヴァンニにとって、それは初めての「一対一の関わり」だったのであり、ほんとうに初めての霊的指導者との出会いとなったのです。こうして、ふるさとから遠く離

れた、悲しくて暗いだけの彼の人生の旅にとって非常に重要な機会が生じたのです。そして、1829年11月3日に叔父のミケーレが彼をベッキ村の家族の元に一時的に連れ帰ったことも、私たちはよく知っています。ほどなくして、11月5日に、ブッティエラでの宣教活動を終えて戻ってきたカロツソ師にジョヴァンニが会う予定だったこともまた私たちが知っていることです。

こうして私は、神の御はからいの信じられないほどの方向づけを強調しておくことが非常に重要であると考えています。ジョヴァンニは神の御はからいに対して、まったく自由に関わろうとしていたのです。ただし、それぞれの出来事において適切なタイミングでおたがいに支え合う人びとこそが、「謙遜で」あり、「強い」社会を築き上げることができるようになるのです。そして、「たくましさ」は宣教する際に非常に重要であり、経験を積み重ねるごとに、ますます成熟するものなのです。

したがって、神の恵みが何にもまして優先されるべきことが明らかなのであり、そのことを何よりも私たち自身にも当てはまります。神の恵みに支えられて私たち自身が成長することが、使命を実りあるものとするにつながるのであります。人生の充実に向けた成長を妨げるような制限や困難は、もはやありません。どのような状況であっても、たとえ最も困難な状況であっても、神の働きに優るものはないからです。

たとえ神の恵みが授けられるからと言っても、困難な状況を改善するために私たちが全力を注ぐべきことから決して免除されるわけではないことは、あまりにも自明なことです。そればかりか、不公平な状況を克服することも必要となります。実際に、ドン・ボスコは、自分で努力をせずに神の御はからいに「歩調を合わせる」ことなどは決してなかったでしょう。オラトリオの最初の礼拝堂に招待された若者たちを弁護し、保護するための努力を惜しまず、絶えず討議を重ね、雇用契約書の草案を作成することを積極的に手伝ったからです。何よりも、ドン・ボスコは決して制限を設けませんでした。若者たちは大空に向かって両手を伸ばすべきものです。そして、常に若者たちが背伸びしながら「あともう一段高い目標」を目指して努力する必要があることも決して忘れてはならないことなのです。

同様の教訓が、カルカッタの聖マザー・テレサによって、その土地で死にゆく人びとのために、彼女の「一見何の役にも立ちそうにない仕事」によっても示されました。とりわけ、最も貧しい若者たちのために生きる決意を固めたときに、ドン・ボスコが手書きで作成して自室の壁に貼りつけた人生の目標となる紙面には次のように書かれていました（白い紙面に黒い文字で書かれています）。「私に若者たちのたましいを授けたまえ、他のものはすべて取り去りたまえ」(Da mihi animas cetera tolle) [ダ・ミヒ・アニマス・チェテラ・トルレ]と。

「忍耐強くなりましょう」、つまり、すべてのことにおいて神を神として尊敬することに

全力を尽くして生きてゆきましょう。

#### 4. 私たちに夢を見させる夢

親愛なるサレジオ家族の皆さん、この『ストレンナ』での私なりの解説を締めくくるにあたって、次の言葉を述べないわけにはゆきません。私が心にいだいている数多くの夢を、若者たちとともに私たち自身に向けても表現しておきましょう。夢を生きることは可能です。ドン・ボスコと同じカリスマに忠実に従って成長しつづけたい、という願望をいただくことに共感しています。まず、たとえ私たちが困難な状況に直面させられたとしても、人びとを窒息死させるような頑固な抵抗を受けたとしても、自分たちの姿勢を決して崩すことなく、憧れをいだきつつも静かな闘志を燃やすことで自分たちのカリスマの炎を絶やさないこと、です。そして、ドン・ボスコの夢を実現しようとする、心の底からの励ましを実感することです。いまや、ドン・ボスコの夢から二百年が経ったのです！

いまや世界中で幅広くサレジオ会が活躍しており、たとえどの場所でも、私が書いたものを読んでくれる人がおります。ここに書かれていることが何か自分に運命づけられている貴重なことなのだ実感しています。それでは、9歳のときのあの夢を実現するために役立つように思われる具体的な要点をいくつか挙げておきましょう。

1. [ほんとうの関わり] ドン・ボスコは、ほんとうの関わりだけが相手に変化をもたらし、救いが実現することになる、ということを通じた生涯を通じて私たちに示してくれました。教皇フランシスコも同じことを私たちに語っています。「ほんとうの関わりがあるときに、外交辞令のような形式的なあいさつだけで済ますわけにはゆかないのです。若者たちの心のなかでは、まだ外交辞令のような形式を用いて世渡りするような、すれた生き方は生じてはいません。実際に、福音が伝わるのは、すれる以前のほんとうの関わりを待ち望んでいる心の状態に対してなのです」(註 37)。だからこそ私は、世界中のサレジオ家族のあらゆる家が、健全なやり方で、ほんものの教育を施す空間となるとともに、おたがいに敬意をいだいて関わる空間となり、さらに成長を助ける空間となることを切に望んでいるのです。こうしたふるまいによって、私たちは変化を起こすことができますし、そうしなければなりません。なぜならば、ほんとうの人間関係こそが重要だからです。私たちのカリスマの原点としてのドン・ボスコ自身の使命の始まりだったあのバルトロメオ・ガレツリ少年との出会いの出来事を、いまこそ思い出しましょう。

2. [神のおはからい (御摂理)] ドン・ボスコが行った人生のあらゆる選択は、彼に対する神の御はからいでありながらも、さらにより大きな出来事のほんの一部分にすぎなかったのです [神の御はからいはドン・ボスコという個人を成長させるだけでは終わらずに、さらにサレジオ家族全体にも作用して人類の歴史そのものを大きく成長させるほどの巨大な出来事にまでおよんでい

たのです]。したがって、ドン・ボスコにとって、その人生の選択は表面的で些細なものにすぎませんでした。彼の夢は彼の人生の逸話としてだけで終わるものではなかったのです。ドン・ボスコの夢は、たしかに単純な出来事を描いてはいますが、しかし神からの召し出しに対する応答の仕方を私たちに教えてくれるものであり、人生の選択の仕方も示すものであり、さらに道そのものでもあり、しかも神の御はからいに沿った人生の計画の縮図がありのままにまとまって統合されたものだったのです。したがって、私はあらゆるサレジオ会員およびドン・ボスコ家族のあらゆる所属者たちが次のように実感することを夢みているのです。神からの使命を果たすために自分の人生を選択するときに、何らかの不快さがともなう場合があると同時に、痛みや疲労をもじかに経験する場合も出てきます。そして、召し出しの際の苦しみは、ちょうど社会において日々何とか生き残るために奮闘する非常に数多くの家族や非常に数多くの若者たちがこうむる疲労感と似た状況として重なり合い、私たちはその苦しみをいっしょに背負うことで、数多くの人びとと家族となりつつ、少しでも尊厳を取り戻して生きる努力をつづけることになるのです。まさに、私たちの誰もが消極的な姿勢に陥ることなく、あるいは無関心な態度で生きることがなくなりますように、私は願っています。つまり、私たちが、まるで観客のような第三者としての態度で、非常に重い痛みや苦しみに直目している若者たちをながめるだけで終わらないようにしなければなりません。

3. [神と私たちとの一致] 「原初の夢、つまり御父である神による創造のわざとしての夢は、私たちの人生に先んじて始まり、かなり時間が経ってから私たちの人生にとっての意味を明らかとするようなものなのです」(註 38)。私たちの神は、私たち一人ひとり、若者一人ひとりに対しての夢をいっていており、御計画をもっています。それは、神御自身が私たちのために考え抜き、「設計」したものです。それは、誰もが望む幸せを秘めた御計画なのです。「神がいただいている夢」と「私たちがいただいている夢」。——まさに、これらの二つの夢は対応しており、いつかは統合されるときが来るものなのです。そして、私たち一人ひとりの人生のなかで神の夢がどのように展開させるのかを理解することは、まず第一に、主が私たちにいのちを授けてくださったことそのものが、実は私たちのことをあまりにも愛しているからなのです。私たちは神から際限のない愛を与えられていただいているのです。ですから、私たちは神が私たち一人ひとりの人生のなかで偉大なことを成し遂げたいと願っておられることを信じなければなりません。私たちは皆、貴重な存在であり、私たちには大きな価値があるからです。なぜなら、私たち一人ひとりがいないと、世界から何かが欠けてしまうからです。この世界と私たちの教会共同体とはつながっています。実に、神はほかならぬこの私から愛されたいと望み、私からこそ声をかけてほしいと必死に待っておられるのです。神は私だけといっしょに生きる瞬間を待ち望んでおられるのです。

4. [夢をみること] そして、夢がなければ人生には意味がありません。人間にとって、つまり私たち全員にとって、夢をみることは、自分自身の理想や人生の価値を心のなかに映し出すことを意味しています。若者たちがかかえている最悪の貧困状態が彼らの成長を妨げています。若者たちは夢をみることによって、それまでは夢を奪われていたことに気づけるようになり、大人たちがでっち上げたむなし夢を押し付けられることから解放されるようになります。私たち一人ひとりが神の夢そのものなのです。何が私のもものなのか、神が私にどのような夢をいただいているのかを知ることが重要です。そればかりではなく、私たちは、自分自身および私たちの兄弟姉妹の幸福に関わる夢を発展させ、達成するよう努めなければなりません。1887年5月16日に、ドン・ボスコが感動のあまり、喜びながらもむせび泣いたことを私たちは思い出さざるを得ません。彼の人生が、彼の使命が、彼の使命を方向づけたあの夢が「実現したからです」。

5. [単純な手段] 神は「単純な手段」を用いてこそ偉大なことを行います。神は私たちの心の奥底で、さまざまな方法を用いて語りかけます。私たちの心、つまり私たちの内面にうずまく感情を通して、あるいは信仰をいただきつつ受け取った聖書の文面に垣間見える神の言葉を通して、神は今日も語りかけるのです。そのような神と私たちとのやりとりは、忍耐によって深められ、愛情によって内面化され、信頼によって果てしなくつづきます。自分自身および共同体全体を大切にして助け合いましょう。少年たち、少女たち、若者たちが自分たちの心の声に耳を傾け、心の内なる動きを読み解き、何かを与えることができるようになるために、彼らと私たちのなか何が起きているのかを声に出して話し合いましょう。浮かび上がる兆候や「夢」をとおして明らかとなる神の声がほんものかどうかを正しく選び取れるように、決して間違った選択をしないように。

6. [若者たちと私たち] 「若者たちがかかえる試練や弱さは、私たちをより良くするのに役立ち、彼らの質問は私たちに挑戦を与え、彼らがいだく疑いは、私たちに自分自身の信仰の質を振り返るきっかけを与えてくれます。彼らからの批判もまた必要なものなのです。なぜならば、たいていの場合、私たちは彼らを通して、心の内側の回心および自分の生き方の心構えそのものの刷新を求める主の声を聞くからです」(註 39)。「あらゆる若者たちが自分の心のなかでいただき、それに従って行動する知性や忍耐力や理解力や愛情をともなって、私たちも自分自身が他者から愛されるように努めることになるのです」(註 40)。私は、あらゆる人に会いたいと夢んでいます。毎日、世界のサレジオ会のあちこちで、あらゆるサレジオ家族の家で、サレジオ会員たちや信徒たちが信仰をいただいて集まっています。これこそが、サレジオ会の教育および福音宣教がもたらす奇跡です。

7. [何かになること] 人間らしく生きることは、「何かになる」ことなのであり、自分自身を実現することに他なりません。それはちょうど病気をかかえていた患者が回復に

向かうときの健康の度合いを愉しみにすることに似ています。神こそが私たちの生活に働きかけ、介入する過程を、私たちの教育が実現しようとしているのです。「サレジオ会における愛情深さに満ちた親切を生きる父親」としてのドン・ボスコと同じ姿になりたいと切望するほどの情熱が、いまこそ必要となります。世界中の青少年少女たちは訓練を受けた専門家と関わるだけでは救われるわけではなく、愛情のまことの専門家と出会うことが欠かせないのです。つまり、教育者、兄弟姉妹、友人、父親、母親として親身になって若者たちと関わる私たちの活躍が必要なのです。

8. [若者たちとの関わり] まさに「街路の司祭 [街の辻に立ちつづけてまで若者たちと出会う司祭という意味]」（そういう言葉が出来上がるよりも、はるか前からその生き方を実現していた）であったドン・ボスコは、その姿勢を文字通り生き抜いてから人生を終えました。それと同様の姿勢を引き継いで生きるサレジオ会員（ドン・ボスコからの影響を受けた人たち）は、まさに「神の子」として歩むことになるのです。たとえ困難や不安のなかにいたとしても、サレジオ会員は「将来を夢みる者」ではありますが、そのような姿勢を保てるのは、まさに神に全幅の信頼を寄せた日常生活を土台として築かれてゆく未来を決して疑うことなく、自分自身や若者たちの生活を丁寧に引き受けて、毎日うまずたゆまずに働いているからなのです（註 41）。だからこそ、いのちをもたらす主との出会いが、若者たち一人ひとりを助け、彼らの夢、つまり一人ひとりの心の奥に潜む神の夢を発見し、彼らが目標に向かって達成すべき旅を支えつづけるのです。若者たち一人ひとりの夢をかなえることが、私たちが若者たちに贈ることのできる最も貴重なプレゼントなのです。私たちは、どれだけこうしたことを望んでいるのでしょうか。こうした若者たちとの関わりは、私たちサレジオ家族のあらゆる家で行われるべきことなのです。

9. [イエスとの出会いを] 私は次のことを信じており、決して疑いません。「若者一人ひとりが、さまざまな活動を行っている際にいっしょに駆け回る」からこそドン・ボスコの心臓は常に鼓動しつづけているのだ、と。「イエスとの出会いの機会があらゆる若者たちに対して与えられるように求めること」（註 42）こそが、神に対する彼の切なる願いだったのです。ドン・ボスコは自分が開いたオラトリオの家では、いま述べたことをなかなか実現できませんでした。彼が世話していた青少年少女たちや若者たちは、当初はイエスとの出会いを望んでいませんでした。若者たちの同様の状況が今日もあり得るので、私たちもまたドン・ボスコとともに最も多様な信仰形態のなかで教育されるような自由の風潮のなかであっても、今日でもイエスのことを知ってもらい、イエスがどのようにしてあらゆる人びとを魅了するのかを発見させるように手助けすることを求められています。他の宗教に所属する若者たち、あるいは特定の宗教に所属してはいない若者たちであったとしても、とにかく自分の考えにもとづいて善良な信仰者となれるよう支援することが大切です。若者たちが自分の信念と理想をいさぐように導くことが欠かせないのです。このことが世

界中のあらゆるサレジオ会の家で現実になることを、私は夢みているのです。

10. [最も貧しく、最も困窮している若者たち] どこにおいても、サレジオ会が取り組むべき活動は、社会で最も貧しく、最も困窮している若者たちを目標にしなければなりません。予防的に愛情を注ぐべく、あらゆる手段を彼らに対して用いなければなりません。数多くの若者たちが墮落しており、不信仰な状態で育ってしまうことをみたときに、ドン・ボスコは激しく泣きました。そして、彼は、事前に何とか彼らを導きたかったと強く実感したのです。彼が心がけていた配慮の仕方は、相手を見守りつつも忠告することで方向づけることであり、一言で言えば相手が神から離れるのを予防することでした。このような配慮は、あらゆる人びとにおよぶものでした。つまり世界中の若者たちがドン・ボスコによる配慮のもとに招かれているのです。だからこそ、彼は新しい財団からの寄付を受け容れる際に、それらの財団がかつて「若者たちが無視されることで人生を台無しにされた場所」(註 43) だったかどうかをあらかじめ詳しく調べることを最優先したのです。私は、いつの日か、ドン・ボスコが最も貧しい子どもたちに対していただいたのと同じ気持ちで献身するサレジオ会員たちのすべての姿をながめることをほんとうに夢みています。私は、会員一人ひとりが最も小さな者のために喜んでいのちを捧げ尽くすのをながめることを夢みているのです。たいていの場合、すでにそうなっている地域もあります。それぞれのサレジオの家が「羊の匂い」で満たされることを夢みえています。教皇フランシスコは今日、使徒職へのあらゆる召し出しについて言及しています。そして、私も教皇と同じことを望んでいます。私たちサレジオ家族全体のために。「誰に対しても、神の呼びかけから疎外されているのだと決して感じてはなりません」。

11. [召し出しを深めること] 「司祭叙階を間近にひかえたジョヴァンニの姿勢は、まさに召し出しを深めるあらゆる者たちの模範としての準備の仕方の傑作なのです」(註 44)。たしかに教皇フランシスコもまた、若者たちに召し出しについて語りながら、次のように述べています。「それが、私がこの世界に存在する理由です。したがって、私たちがキリスト者としての使命に照らし合わせてながめるときに、あらゆる形態の司牧活動はどれでもが神からの召し出しとしてみなし、しかも教育もまたどれも神からの召し出しとしてみなし、さらにいかなる霊性もまた神からの召し出しとしてみなさなければならぬのです」(註 45)。ドン・ボスコと同じように各自が自分の召し出しを深めてゆけるように、私は、あらゆる若者たちが次のことを発見できるようにあらゆる助言を授けつつ支援することが私たちの義務であると考えています。つまり、神が彼らに期待していること、彼らが「高く飛べるようになる理想」をいだかせるべく最善を尽くすことが大事なのであり、神から授けられた自分自身への贈りものとしてのこの人生をじゅうぶんに生きたいと若者たちが願えるようになることが欠かせないのです。

12. [マリアに倣う] 母親であるとともに世話人でもあることで、マリアは輝いているのです。彼女自身が幼い頃に、天使からのよびかけの言葉を受け取ったときに、つまり重大発表の際に、彼女は必要以上の質問はさしはさみませんでした。神からのよびかけを伝えた天使の言葉を彼女が「はい」と受け容れたときに、彼女は次のように言いました。「御言葉どおりになりますように」と。彼女は、神の言葉を受け容れることにすべてを賭けたのです。彼女のいとこのエリサベトがマリアの手助けを必要としたとき、マリアはすぐに旅の計画を立てて、自分にとって必要なものは脇に置き、決してとどこおることなく、すみやかに出発しました。そして、息子のイエスの痛みが彼女にも影響を与えたときでさえ、彼女は強かったのです。マリアこそが彼 [イエス] を支え、最後まで付き添った女性だったのです。母親であり教師でもある彼女は、たとえ騒音や暗闇が色濃く支配する環境に身を置いていたとしても、そのまっただなかで彼女を求める若者たちをみつめるのです。彼女は痛みの激しさに支配される失神状態の沈黙のなかでこそ語りつづけ、希望の光を灯しつづけるのです (註 46)。私はマリアに忠実に従うことを夢んでいます。ドン・ボスコがマリアという母親によって人生を大きく転換させたように、私たちサレジオ会員たちは、幼い少年少女たちばかりではなく、さらにあらゆる若者たちをも、あの母親の愛情に負けず劣らず恋に陥れさせるのです。なぜならば、「聖母こそがドン・ボスコにとってすべてだったからです。そして、同じことを望むサレジオ会員たちが創始者の精神を身につけるには、この献身的な姿勢で創始者に倣わなければならない」からなのです (註 47)。

## 5. 「9歳の夢」から「祭壇での涙」に至るまで

この解説も、ようやく締めくくるときになりました。まだまだ、もっとたくさん付け加えることもできますが、これでやめておきましょう。ともかく、これまで私が書いたことは、間違いではないと思います。どうか皆様の心に届きますように。まさに素晴らしい知らせだからです。

私はただ、皆様に少しだけ時間をかけて、このドン・ボスコの「夢」の記録のテキストを心のなかで味わって熟考していただきたいと考えただけなのです。ドン・ボスコが涙を流しながら実感したことを数行ほどでつづった『自伝的な回想録』の箇所を大切に読み直しましょう。

イエスの聖心の大聖堂のなかにあるキリスト者の助けである聖母マリアの祭壇の前で、数日のあいだ祈りつづけ、自分自身を奉献した、その瞬間、ドン・ボスコは母親のマルゲリータの声や、主イエスの言葉を再び聞きました。その夢のことをたいして気にもとめようとしなかった祖母、そして疑問さえいだいた兄弟たちの声もまた響きました。すぐそこで、その瞬間、62年後になって、彼はあの先生 [マリア] が預言した通りに、すべてを理解したのでした。

この物語は、私をいつでも感動させます。だからこそ、あなたがたも、もう一度読んでみてください。そして、個人的にそれについて黙想してください。もう一度でよいですから。

ドン・ボスコが自分自身を神の前であますところなく明け渡す聖なる奉獻の祈りを始めてから、少なくとも 15 回にわたって実感したことを『自伝的な回想録』(MB) のなかでは以下のように述べています。「彼は、そこにしばらく立ち止まり、じっとやりすぎざるをえないほどに強い感情」に満たされて、思わず涙を流しました。彼を補佐していたカルロス・ヴィリエッティ師は平静をよそおって、ひたすら自分の役目をこなしつつけるために意識を別のところにそらさなければなりませんでした。カルロス師がドン・ボスコのいだいていた感情の動きの原因を(彼に尋ねると)ドン・ボスコは次のように答えました。10 歳のときに若者たちが多数登場した大群衆の夢をみたときに実際に見たり聞いたりすることができたあの場面が急によみがえったのです。自分の母親や兄弟たちがその夢について議論していた場面もまた、よみがえってきました……。そのとき、聖母は『やがてあなたはすべてを理解するでしょう』と言われました。突然、その日から 62 年にわたる苦難や犠牲や闘争の日々が始まり、歳月が過ぎ去ったのです。そのとき、突然、予期せぬ稲光 [いなびかり] が走り、ローマにあるイエスの聖心大聖堂の建物のなかで彼に明らかにしたことが、彼の使命の意味を悟らせるための頂点としての神秘的で人生の水準が上昇するほどの出来事となったのです」(註 48)。

私はキリスト者の助けである聖母マリアが私たち家族全員にとってほんとうの母親であるとともに教師でありつづけてくださることを心から信じています。私は、人生を決定づけた初夢としてドン・ボスコがみた情景のなかで主イエスが語られた預言的な言葉が真実であると確信しています。聖霊の賜ものとして、御父の望むカリスマが存在するあらゆる場所で、マリアはいまでもそこにしっかりとたたずみつづけています。そして、私たちの努力をはるかに超えて、どの家庭でもマリアがともにいてくださるのだと私たちは信じてもよいのだと実感しています。他ならぬドン・ボスコ自身がヴァルドッコという聖域について次のように述べているからです。

「あらゆるレンガはキリスト者の助けである聖母マリアによる恵みです。彼女がじかに支えてくださらないかぎり、私たちは何も成し遂げることができません。彼女 [教会の母] は御自分の家としての教会共同体を建てましたが、それは私たちの目には驚くべきことに見えます」。

無原罪の聖母であるとともにキリスト者の助けであるマリアが、これからも私たち全員を御手のうちで支えつつ導いてくださいますように。アーメン。

トリノ・ヴァルドッコにて、2023 年 12 月 8 日

サレジオ会総長アンヘル・フェルナンデス・アルティメ枢機卿 SDB

■原註

1. F. MOTTO, Il sogno dei nove anni. Redazione, storia, criteri di lettura, in «*Note di pastorale giovanile*» 5 (2020), 6.
2. P. STELLA, *Don Bosco nella storia della religiosità cattolica. 1. Vita e opere*, LAS, Roma 1979, 31ff.
3. P. CHÁVEZ V., Let us make the young our life's mission by coming to know and imitate Don Bosco, in *AGC* 412 (2012), 35-36.
4. F. MOTTO, op. cit., 6.
5. J. BOSCO, Memoirs of the Oratory of St Francis de Sales from 1815 to 1855, in ISTITUTO STORICO SALESIANO, *Salesian Sources 1. Don Bosco and his work*, LAS, Rome 2014, 1329.
6. Cf. F. RINALDI, Circular Letter published in *ASC* Year V - N. 26 (24 October 1924), 312-317.
7. G. Bosco, Memorie dell'oratorio di san Francesco di Sales dal 1815 al 1855, in Istituto Storico Salesiano, (saggio introduttivo e note storiche a cura di A. da Silva Ferreira), "*Fonti*", serie prima, 4, March 1991. Cf. A. Bozzolo, Il sogno dei nove anni, 3.1 Struttura narrativa e movimento onirico in A. Bozzolo (a cura di), *I sogni di Don Bosco. Esperienza spirituale e sapienza educativa*, LAS-Roma, 2017, p. 235. note: an English translation of this is available at <http://sdl.sdb.org:9393/greenstone3/library/collection/dbdonbos/document/HASH3f428469cbc5458e999f74?>
8. R. ZIGGIOTTI (ed. Marco Bay), *Tenaci, audaci e amorevoli. Lettere circolari ai salesiani di don Renato Ziggiotti*, LAS, Roma 2015, 575.
9. Salesian Brother Marco Bay has been a professor at the Pontifical Salesian University in Rome and is currently director of the Salesian Central Archives in Rome (UPS). He generously placed in my hands the research he had carried out on the references that the previous Rectors Major had made on the dream at nine years of age. I would also like to take this opportunity to thank Fr Luis Timossi, SDB, of the Ongoing Formation Centre in Quito, and Fr Silvio Roggia, SDB, Rector of the Blessed Ceferino Namuncurá Community in Rome, for their notes and suggestions.
10. P. ALBERA, *Direzione Generale delle Opere Salesiane, Lettere Circolari di don Paolo Albera ai salesiani*, Torino 1965, 123; 315; 339.
11. F. RINALDI, Lettera circolare pubblicata in *ACS* Anno V - N. 26 (24 October 1924), 312-317.
12. Ibidem.

13. La commemorazione di un “sogno”, in *BS* Anno XLIX, 6 (June 1925), 147.
14. P. RICALDONE, *Anno XVII*. 24 March 1936 N. 74.
15. P. RICALDONE, op. cit., N. 78.
16. R. ZIGGIOTTI, op. cit., 129.
17. R. ZIGGIOTTI, op. cit., 264.
18. L. RICCERI, *La parola del Rettor Maggiore. Conferenze, Omelie Buone notti*, v. 9, Ispettorato Centrale Salesiano, Torino 1978, 27.
19. Ibid, 28.
20. E. VIGANÒ, *Lettere circolari di don Egidio Viganò ai salesiani*, vol. 1, Roma, Direzione Generale Opere Don Bosco, 1996, 10.
21. BM VII, 171-172. Quoted in J. E. VECCHI, *Educatori appassionati esperti e consacrati per i giovani. Lettere circolari ai Salesiani di don Juan E. Vecchi*. Introduction, key words and indexes by Marco Bay, LAS, Roma 2013, 380.
22. P. STELLA, *Don Bosco nella storia della religiosità cattolica*. Vol. II, p. 32. Quoted in J. E. VECCHI, op. cit., 381.
23. P. CHÁVEZ VILLANUEVA, *Lettere circolari ai salesiani (2002-2014)*. Introduction and indexes by Marco Bay. Presentation by Fr Ángel Fernández Artime, Roma, LAS, 2021, p. 450.
24. F. MOTTO, op. cit. 8.
25. Ibid, 10.
26. J. BOSCO, *Memoirs of the Oratory*, quoted in F. MOTTO, op. cit., 9.
27. F. MOTTO, op. cit., 10.
28. Quoted in P. RICALDONE, *Anno XVII*. 24 March 1936 N. 74.
29. J. BOSCO, op. cit., 1177.
30. P. RICALDONE, *Anno XX* Novembre–Dicembre 1939 N. 96
31. A. BOZZOLO (ED), *Il Sogno dei nove anni. Questioni ermeneutiche e lettura teologica*, LAS, Roma 2017, 264. Cf. fn 7 re availability of this in English.
32. E. VIGANÒ, *Lettere circolari di don Egidio Viganò ai salesiani*, vol. 1, 1996, Roma, Direzione Generale Opere Don Bosco, 1996, p. 10.
33. R. ZIGGIOTTI, op. cit., 264.
34. F. MOTTO, op. cit., 7.
35. Cf. P. CHÁVEZ, “Let us make the young our life's mission by coming to know and imitate Don Bosco”. First year of preparation for the bicentenary of his birth. *Strenna* 2012, in *AGC* 412 (2012), 3-39.
36. E. VIGANÒ, *Lettere circolari di don Egidio Viganò ai salesiani*, vol. 1, 1996, Roma, Direzione Generale Opere Don Bosco, 1996, p. 31.
37. SYNOD OF BISHOPS, *Young people, faith and vocational discernment. Final*

*Document*. Elledici, Torino, 2018, n°128.

38. FRANCIS, *Christus vivit. Post-Synodal Apostolic Exhortation to Young People and All the People of God*, LEV, Vatican City 2019, no 194.
39. SYNOD OF BISHOPS, *Young people...* op. cit., no. 116.
40. Cf. XXIII Capitolo Generale Salesiano, *Educare ai giovani nella fede*, CCS, Madrid, 1990, n° 99. [GC23, no. 90]
41. Cf. F. MOTTO, op. cit. 14.
42. R. SALA, Il sogno dei nove anni. Redazione, storia, criteri di lettura, in «*Note di pastorale giovanile*» 5 (2020), 21.
43. F. RINALDI, Il sac. Filippo Rinaldi ai Cooperatori ed alle Cooperatrici Salesiane. Un'altra data memoranda, in *BS Anno XLIX*, 1 (Gennaio 1925), 6.
44. E. VIGANÒ, *Lettere circolari di don Egidio Viganò ai salesiani*, vol. 2, 1996, Roma, Direzione Generale Opere Don Bosco, 1996, p. 589
45. FRANCIS, *Christus vivit*, no. 254.
46. Cf. FRANCIS, op. cit., 43-48, 298.
47. R. ZIGGIOTTI, op. cit., 264.
48. *BMXVIII*, 288 [Taken from the English New Rochelle translation].

2024年1月5日（金）－1月9日（火）；試訳 阿部仲麻呂

※文中における [ ] の箇所は、訳者による補足説明です。

※「神の御摂理（みせつり）」を「神の御はからい（おんはからい）」と訳しました。

※以下のサイトから英語本文をひろいました；[Strenna\\_2024\\_en.pdf \(sdb.org\)](https://www.sdb.org/Strenna_2024_en.pdf)